



## 鉄塔の男

私の家の近所の原っぱはもう住宅も散在しているだけの小高い丘となっているのだが、そこには小さな公園があった。私は特に理由もなくその公園を気に入っていたものだから、とにかく会社が引けて家に帰るときは多少遠回りにはなろうともその公園を通して帰ることにしていた。

残業などして帰宅が深夜に及ぼうとも私は別に意固地なつもりもなかったが必ずその公園を横切った。むしろ夜は風も心地よく、その公園のベンチに座って夜の空気を吸い込むとそれはひんやりと私の肺を満たし、公園の下に広がる家々の窓からこぼれる小さな黄色い光がとてもきれいでなにか山の頂上から下界を見下ろすような爽快感すら覚えたのものである。

しかし本当にそれは公園であったのだろうか、そもそも柵もなければ入り口もない。看板も無い。ただ小高い丘のそこかしこに背の低い雑草が生えている中に、シーソー、ジャングルジム、砂場、ブランコ、滑り台、ベンチなど、それらが手入れをされている様子もなくただ無秩序に設置されているだけの話で、ひょっとするとそれは公園ではなくてそうした遊具の廃棄場所であったかもしれない。その証拠にはついぞ子供の遊んでいる姿を見かけたこともなかったのである。

それでもそれは私にとってはむしろ好都合であったので、誰もいないその公園では私は人の目を気にする必要もなく、ネクタイを緩めるとだらしなくベンチに伸びてポーッと煙草などくゆらせて空を眺めたりすることもできたのだ。

ある夏の日の夕刻、私は例によって仕事帰りの途中にその公園に立ち寄った。

すると公園のほぼ中央に今までなかった新しい塔が立っていたのだ。

それはよく工事現場で見かけるような鉄骨で組まれた高さ10mほどの火の見櫓のようなものだったが、その造りはいかにも荒く、不器用で、鉄骨の柱は妙な具合にひん曲がり、長さも合わないものを無理矢理に溶接して補強したような代物だった。

よくも一晩でこんなものを作ったものだと思って感心したが、いやこれは単純に捨ててあるのかしらん。それならいっそ横倒しにでもしておけばよかつたろうにと近づいてみると、その根本はしっかりとコンクリートとボルトで固定されているので、やはりこれは人為的に建てられたものと思われた。

そんなことを観察していると、上の方でなにやらガチャガチャ音がした。

何か部品でもはずれかけているのだろうか、頭の上にでも落ちてきたら事である。首をすくめて見上げてみたが、どうやらそういうことでもなさそうであった。下から見たところその塔の最

上部は鉄板の床とその床を囲ったこれまた鉄板製の高さ1mほどの覆いしかわからないのだが、なんだかその中にいるような気配なのである。

あんな高いところにまさか犬ではなかろうから猫だろうか、しかし見たところ鉄骨の柱には登れそうな足がかりもなければ、そのてっぺんの囲いに入り込めそうな隙間があるでもなし、私は気色悪さと好奇心とが入り交じった思いに捕らわれながら様子を窺ったが、それきり音は止んでしまった。

しかし確かに音はしたのだと、私にはその確信があったから、オイ、とおそるおそる声をかけてみた。

しばらく反応がなかったので、もう一回何か言ってみようかと考えていたところが、

「オイ、は無礼だ」

と、声がしたから驚いた。まさか相手が人間だとは思わなかったのだが、一応火の見櫓に似たような建造物だから人が登っていたとしても不思議はなかったのかもしれない。けれども物好きな人もいたものだ。何が楽しくてあんなところに登っているのだろう。そう思うと、本当に人間なのだろうかと、急に不安になってきて、その日はそのままスタコラ家に逃げ帰ってしまった。

しかしながらこの小事件は私にとってはおおいに気になる出来事だったので、帰ってからもどうしても頭の中から離れない。あの男は...たぶん男だろうな、いったいあんなところで何をしていたのであろう。いったいどこから来たのだろう。どうやってあそこまで登ったのだろう。どんな顔をしているのやら。

そこで次の日、私は会社からの帰りがけにまたもやその鉄塔の下を訪れた。あの男はまさかまだいるのではあるまいな。

鉄筋の柱を拳でコンコン叩きながら、私は、モシモシと呼びかけた。返事はなかったが、気配があった。もう一回、コンコンモシモシ。

「なんだ」

果たして返事があった。あるにはあったがはなはだ無愛想である。しかしなんだか私は安心した。そうして心の底ではまだいて欲しいと思っていたのに気がついた。

「お前さんはそんなところで何をしているのだ」

「...」

「何をしているのだ」

「初対面の相手にそんなことを聞くのは失礼というものだ」

昨夜といい今日といい、いやに礼儀にこだわるやつであったが、言われてみればなるほどそういうものかもしれなかったから、今度は丁寧に聞いてみた。

「何をしているのですか」

「お前には関係ないことだ」

なんだ。どっちにしたって非常にそっけないではないか。

けれどももとにかく人間だ。少なくとも怪しげな生き物ではないようだからまあよかった。しかし向こうはこちらにまるで関心がない様子であったのだが、逆に私の方は好奇心だけがむくむくと頭をもたげてきて仕方がない。

「どちらの方ですか」

「...」

「そこは暑いでしょう」

「...」

ほとんど反応は返ってこないのだったが、聞こえてはいるはずなのだ。それをこれほど冷淡に無視するのはそれこそ礼儀に欠けているのではなかろうか、さすがに少しムツとしたから、つい言葉も気色ばんでしまった。

「お前さんは誰なのだ」

「お前に教える義理はない」

ずいぶんひどい言われ方だったが、そう言われてしまっただけで確かに理屈としてはそのとおりで、むしろ私の方に非があるような気もしてきたから私はそれきり黙り込み、鉄塔の根本に座り込

んだ。

「ああ、今日は夕焼けが妙にきれいだ」

「夕焼けなのか」

私はちょっと驚いて尋ねた。

「お前は目が見えなかったのか」

「見えないのではない。見ないのだ」

「見ればよかろう」

「その必要はない」

「...」

言葉使いは乱暴ではあるけれど、なんだかそれは哲学めいて聞こえもしたから、案外こいつはエライのかもしれない。賢人とかいうヤツかもしれないな。そんな風にも考えられて、すると私はやっぱりへりくだってしまうのだ。

「話してもかまいませんか」

「話すのは勝手だが、聞くとも限らない」

うむ、歯に衣着せぬが含蓄深いコトバであった。

私は大いに感銘を受けたから、それからは日記でもつけるような気持ちで毎日ここに来て、独り言にも似た呟きを語ることになったのだった。

例えばある日差しの強い暑い日曜日、私は鉄塔の影の下に寝ころんだ。

「雲が動いています」

「なんだか大きな氷山のようです」

「ピッケルを使ってあの峰にしがみつくのほどのような気分か」

すると彼は唐突に警句を吐くのだ。

「踏み外せば落ちる」

なんでもないコトバではあるが、それを彼が言うと実におもむき深いものがあるのである。私はまたまた敬服し、ナルホドネと感心するのであった。どうやら私は彼に心酔し始めているようだった。

私は毎日鉄塔に通い、色々なことをしゃべった。

そんなある日、珍しく彼の方から声がかかった。

「オイ」

人にはオイは無礼だと言っておきながら、それはいやにぶっきらぼうで高圧的な態度に聞こえた。

「腹が減った」

そういえば彼は何を食べていたのだろう。そもそも鉄塔から降りてきたところなど見たことはないし、なんとなくただ鉄塔に住み着いて動かないで平気なのだと思っていたが、人間である以上それは食べなければならないわけで、しかし彼にはそれまでそんな世俗を感じさせない雰囲気があったのである。

「俺は鉄を食べる」

「鉄？」

「俺は鉄を食べる」

「そんなことはできますまい」

「為せば成る」

そういう問題だろうか。しかしどうしろというのだろうか。ちょっと困惑してしばらく考えてみてから私は辺りを物色してみた。するとなんか錆びて崩れかけたカンカラを一つ見つけたのでそ

いつを鉄塔の櫓めがけて投げつけてみた。何回か放っていると、うまいこと櫓の中にはいった。

するとガチャリと音がして、それからガリガリ何かをヤスリで削るような音がする。本当に食べているだろうか。

「錆びくせえなあ」

賢人にあるまじき下品な物言いをする、またガリリガリリ。

それから彼は時々私に同じように食料を要求するようになった。いつでもそれは鉄であるので、私は冗談半分にアルミや銅ではダメなのかと聞いてみたことがあったのだが、彼に言わせるとそのようなものは邪道であって、あくまでも鉄、これに尽きるとのことであった。彼は真面目にそのように主張するのであった。

しかし鉄屑といえども探してみるとそうそこいらに簡単に落ちているものではない。けれども彼の要求は有無を言わさないものがあるわけで、私はとうとうある日ブランコの鎖を頂戴した。これを鉄塔の櫓まで投げあげるのは相当に苦勞したものだが、砲丸投げの要領でグルグルこれを振り回して勢いをつけてヤツと投げることを数回、なんとか櫓の端にその先端を絡めることができたのだった。

するとスルスルとその鎖は櫓の中に手繰り込まれていって、これはかなり純度の高い歯ごたえのある食料であったようで彼は満足しているようだった。

おそらく、と私は想像した。鉄ばかり食べているから彼の体は砂鉄だらけに違いない。いや、体だって鉄化しているのではなからうか。だからあんなにガチャガチャいわせているのだろう。

季節は過ぎて秋となった。吹く風も涼しくなった。そうして私と彼の関係はやはり同じようなものだった。私は時に食料を請われ、最後のブランコの鎖を地上と櫓との連絡に使うようになった。鎖の端に鉄屑を結びつけると彼がそれを引き上げるのである。同じ要領で鉄棒なども彼に与えた。それから私は鉄塔の下に陣取ると、ガリリガリリと彼の食事の音を聞きながら、静かに己を語るのであった。

私は仕事に行く以外にはほとんどの時間を鉄塔の下で過ごすようになった。家に帰るのは夜も更けて、それは単に食事と睡眠をとるためだけ。独身だからそんな無理をして、とがめる者もいなかったが、端から見たら変わり者ではあったろう。

「いったいお前はオレにそんなハナシを聞いて欲しいのか？」

「いや、自分でもよくはわからないのですが...」

「オレはほとんど聞いてないぞ」

「いえ、いいのです」

それから冬が来た。公園の鉄製の代物はあらかじめ彼が食べてしまった。もうほとんど何も残っていない。そう伝えると、彼は「フン...」と言ったが、特別不満そうでもなく諦めたでもなく、そのコトバはいつものようにそっけないものだった。

彼のことだからもっと無理難題を言ってくると思ったので、それは意外な反応だったが、私にとっては重労働から解放されてむしろそれは好都合であり、それからは私がしゃべるのみとなった。

彼は時折例のごとく警句を吐いたが、それは次第に弱々しく、間遠くなってきた。鉄分が不足して元気がなくなってきたのだろうか。

しかし私もわざわざ彼のために奔走して鉄を工面する気もしなかったもので、ただいつもの通り鉄塔の下にうずくまってボソボソと独り言ともとれるコトバを呟くだけになってしまった。

そんな風になってからどれくらいの月日が立っただろうか。気がつくと既に私は仕事にも行かず、家にも帰らず、一日中鉄塔の下で独り言を呟くだけの状態になっていたが、ふとある日久しぶりに彼の様子が知りたくなったのだ。

彼と出会った最初のあの日のように、私は鉄骨を叩いてみた。コンコンモシモシ？コンコンモシモシ？いないのですか？いたら返事をしてくれませんか。すると櫓の上から小さな声が聞こえてきた。それは本当に小さなか細いかすかなささやき声であったから、ほとんど聞き漏らすくらいのものであった。

「つまるところお前さんは何がしたかったのだ」

彼の最後のコトバである。

私は鉄塔によじ登り始めた。幸い彼が垂らしたブランコの鎖が役に立った。鉄骨は厳しいほど冷たくて手が凍りそうだった。

私の吐く息は白く凍てついた冬の空気の中を流れ、鉄塔の上から見る街の空は暗かった。ようやく櫓の角に手をかけると、私は囲いの中に入ることができた。

囲いの中には何もなく、まして人などいなかった。ただその錆の浮いた囲みの片隅にうず高く砂鉄が積もっていて、見ようによっては人型に見えないでもなかった。私は囲みの端に腰を下ろし、そうして膝を抱えてうずくまると、もう動く気がしなかった。